

山形大学附属博物館報 18

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY 1992. 3. 31

目 次

大学と附属博物館	(1)
「伴大納言絵詞」の展覧会を見て	(2)
未来社会の博物館	(3)
博物館実務実習の今後について	(4)
資料紹介	(5)
平成3年度公開講座・特別展を終えて	(6)

大学と附属博物館

館長 横山 昭 男

大学改革の一つの課題として、大学の社会解放が話題となっている。附属博物館は、その性格上、はじめから一般社会への公開を一つの役目とする施設であった。ところで、本学の博物館は、日常業務のほかに、主にどんな活動をしているのか、その現況を紹介し、また見学者の意見を参考としながら、あるべき博物館の課題にもふれてみることにしたい。

博物館は、本来物質資料を収蔵・展示し、教育・研究に役立てるためにあるが、当館の場合、歴史・考古・民俗資料と生物・地学資料が主である。資料は、本館所蔵のほか、学外有志の寄贈・寄託品、学内研究室から移管したものなどいろいろである。かつては、研究分野も余くちがうところにあったものも、博物館では、隣に並んでいる場合も珍らしくはない。博物館とは、学際的なものであることを象徴しているといってもよい。ある博物館学の専門家が、大学の博物館は特定学部から分離して設置すべきである、といっているのはもっともであるともいえる。

いま、研究にとっても、教育にとっても、物質資料は重要な意味をもちつつある。小生の専門が歴史学であるので、その例が偏るかも知れないが、考古学の場合はいざ知らず、歴史学の場合は、これまで文献資料にのみ依存しがちであった。し

かし現在では、原始・古代の発掘した遺物はもちろん、各時代の生産技術や生活用具などの民俗資料がいかに重要であるかは常識となりつつある。現代の学生の教育にしても、社会変化が激しく、また映像文化に慣らされていることを知るにつけ、小学生の生活科のみでなく、「即物教育」は、一般大学生にとっても、一層重要な要件になっていると考えるのである。

本館の毎年の事業の一つに、夏期休暇中に実施する博物館実務実習がある。博物館学芸員の資格をとるための必修科目となっているので、年々希望者が増え、平成3年度は、各学部学生120名が受講した。3班に分け、教官学芸員の協力によって、各1週間の時間制が組まれたが、受講生にとっては、暑い夏休みの一つの思い出ともなっているようである。

博物館は学内の利用者のほか、学外からの見学者、利用者も多い。研究の目的で、資料収集のために訪れる研究者、展示物の見学にくる地域の人々、また大学への用事を兼ねて見学にくる方など、いろいろである。見学者の中には、日本でも珍しいものは、と説明を求める方もおれば、新しい「生活科」教育の研究に役立つものが多い、と感想をもらした大学教師もいた。

博物館では、1981年以後、ほぼ毎年1回、公開講座を実施している。大学の公開講座は、それぞれの教官の研究成果の一端を、共通テーマのもとに、一般の方にも分かり易く講義するものであるが、多くは学部ごとに行われるのに対して、博物館の場合は、小川川キャンパスの学部だけでなく、農・

工・医各学部の教官の協力を得て行っている。したがってテーマも学際的なものを選び、例えば「土と生活」(1983)、「水と文化」(1986)、「環境と生活」(1991)などである。博物館の公開講座は、その機能を生かして、既成の学問分野の枠を越えた内容や構成に特色を見いだす努力が必要であり、それは総合大学を生かす使命の一つであるとも思われる。(教育学部 教授)

「伴大納言絵詞」の展覧会を見て

仲野 浩

東京丸の内への帝国劇場9階にある出光美術館で、平成3年10月31日から12月8日迄、4日間の休館日を除いて、都合35日間、(国宝伴大納言絵巻展)が開かれた。出光美術館の開館25周年を記念した滅多に見ることができない展覧会であった。

国宝「伴大納言絵詞」(展覧会では絵詞のかわりに絵巻という字を使っていた)は、現在3巻物になっている。上巻は839.5cm、中巻は858.7cm、下巻は931.7cm(縦は各31.5cm)に仕上げられているが、このような形になっている経緯はさておき、この絵巻は実際にあった平安宮の応天門の火災を實に見事な筆致で描いている。この絵巻ができたと考えられる12世紀後半より約300年前の貞観8年(866)に起った応天門の炎上は、通常応天門の変という名で呼ばれているが、六国史の最後の『日本三代実録』でその次第を追ってみると、火災は閏3月10日、「夜、応天門火、延焼榎鳳翔宮内樓」というものであった。応天門とその西翼の榎鳳樓及び翔雲樓を焼いた火災は、当初から放火と見做されていた。平安宮の正門である朱雀門の北には八省院(朝堂院)があるが、応天門は八省院の南中央に位置する正門で、東北106尺(約32m)、南北56尺(約17m)の基壇上に建つ間口5間、扉3間、円柱朱塗、碧瓦葺、東西に二つの楼をもつ堂々たる門であった。それが放火されたのだから、事は重大である。旬日を経て焼け落ちた応天門の北の会昌門の前で「大赦」をしたり、崇福寺等で「転読」等を行い、「消災變」そうとしたりの騒動であった。かてて加えて、この事件の前後には、旱天や霖雨が繰り返され、人々は飢疫に苦しんだ。応天門が炎上して暫くした頃のことであろうか、

この年の「春」、左大臣源信の家が大納言伴善男・右大臣藤原良相の軍に包囲されようとしたことが起っている。天災や様々な人の葛藤があった中で、閏3月の応天門怪火の一件も人々の頭から去ろうとしていた失先の8月3日、「左京人備中権史生大初位下大宅首藤取告、大納言伴宿祢善男、右衛門佐伴宿祢中庸等同、謀行、火焼、応天門」^{（一）} げる告発があった。早速、伴善男等に対する審問が勅解^{（二）} 由使局で始まり、善男等の犯行否認にも拘らず、9月22日、伴善男・伴中庸・紀豊城・伴秋実・伴清繩等5人は、「坐、燒、応天門、当、斬、るも、詔によって「降、死一等、並、起、之、遠流、」せられた。伴善男は伊豆国へ、善男の子中庸は肥前国に流され、善男は翌々年の貞観10年(868)、その生涯を閉じた。『日本三代実録』等の記述ほど事件は単純ではない。これらの記事の中には、9世紀の平安貴族社会でのさまざまな対立、敵対、連合等がある筈であり、真相の次第を事細かにするのは難しい。さまざまな説がなされているが、応天門の変は、太政大臣藤原良房が舞台には登場しない主役を演じたドラマの一つであることは間違いない。善男等に対する取調べの最中の8月19日、良房は摂政となり、12月には養子の基経が破格の昇進を遂げて中納言になっている。

応天門の変は、事件後、さまざまな物語類にも登場するようになる。「伴大納言絵詞」は、13世紀にできたと考えられる『宇治拾遺物語』に「伴大納言焼、応天門、事」として載せられている物語とほぼ同じ詞書を絵巻化したものであるが、11・12世紀頃には、応天門の変に関するこうした物語が成立していたのである。これは物語であり、事実と相違した点があるのは当然である。事実関係はともかく、この絵巻3巻全部を一時に見ることができたのは、伴せの一語に尽きる。35日間の展覧会の期間中、3巻全部を見ることができたのは17日間であった。「伴大納言絵詞」は、江戸時代のある時期から小浜藩主酒井家の所有するところとなった。「吉備大臣入唐絵詞」(ボストン美術館蔵)も同様である。「伴大納言絵詞」は、昭和58年、出光美術館の所蔵となるが、美術館の25周年記念として、この絵巻だけの展覧会が開かれた。国宝類には保存のため展覧にさまざまな規制が加えられている。保存上已むを得ないことである。巻かれている絵の場合、開いたり巻いたりしているうちに、少しずつ顔料が剥落することが多いし、

ライトによっても顔料が変化する危険が多い。こうした制約を設けざるを得ない中で、今日のような展覧会に接することができることはそう度々はない。この絵巻も、ある巻のごく一部を開いている展覧会で見るることができる機会は、何年かに一回はあろう。今回初めてこの絵巻の全巻全場面を2回にわたって目の当りにして、あらためて大伴氏の盛衰や応天門の宴を考える機を得た。それにしても、こうした滅多にない展覧会が開かれていることが、今以上に全国各地に知らせる良い方法を編み出す必要があると痛感したし、各種の博物館施設についても、もう一度あり様を考えてみるべきだという想いが湧いてきた。

(教養部 教授)
(附属博物館運営委員)

未来社会の博物館

北村 優季

正月休みを利用して久しぶりに生まれ故郷に帰った。今から十数年前までは町にある信号機はたしか点滅式のもので一台だけだったし、町で一番立派な建物も農協の三階建てビルしか思い浮かべない。そういうどこにもでもある田舎町である。しかしこの十年ほどの国土開発はここにも押し寄せていた。まず山を削って新しいバイパスが開通し、木造の町役場もその側に引っ越して鉄筋のものに面目を一新した。もう一つのバイパスには大型店が立ち並び、病院や銀行が相次いで建設された。自動車の通行量も、この二、三年で急速に増加したように見える。しかし一旦駅前の商店街に足を向けると、子供の頃から見知った商店がそのままに軒を並べている。多少改装はしてあるものの、まるで時間に取り残されたような風景である。それはたしかに一種の郷愁を誘うが、しかし歩いているのは老人と子供ばかり、かつての活気は確実に減退していると思う。

日本の未来の一面が高齢化という言葉で語られるとすると、ここにあるのはその未来社会の現実にはかならない。とはいえ、私は必ずしもそのような社会を悪いとも思わない。東京のようなビビリした人間関係はもうたくさんだし、いつもなにかに追い立てられるような感覚も、一步外に出ればそれがいかに異常であったかに気付く。高齢

化社会がある意味では安定した、落ち着きあるものならば、日本の未来もそう捨てたものではないだろう。

ところでこのような町の変貌は、実は日頃山形県に暮らしているものにとってはさほど珍しくはない。ただ「わが町」の体験で驚いたのは、その小さな町にも外国人の姿がちらほら見られるようになったことである。駅前のアパートには東南アジア系の人びとが入居しているというし、近所のスーパーでもしばしば中東系の人を見かけるといふ。たまたまフィルムを買いにいったカメラ屋では、年輩いた白髪の主人と手振りを交えて交渉する中国人にも出くわした。遠来の客人の懸命な姿と店の主人の、日本人に対するよりも居丈高な接客態度が印象的だった。概してこうした人たちは、大会社ではなく、近在の中小企業で働いているとも聞いた。人口一万人ほどの小さな町に、当然のことのように異邦人が歩いている風景、「国際化」という言葉を初めて実感した。

国際化が日本の未来のもう一つの姿であると思えば、この山形県にもすぐそこに同じような社会が迫っている。そして本学附属博物館のような施設もまたその例外ではない。そもそも日本の博物館は一部を除いて、ことさら見学者を意識することは少なかつたのではないか。見る側も見る側も同じ日本人ということで、なにを展示するにしてもそこにはある暗黙の了解があったように思われるのである。しかし大学や町の中にさえ外国人が増えつつある現状をみると、これまでの博物館のあり方もいずれ変わらざるを得ないだろう。考えてみると、博物館ほど大学や地域の概要をコンパクトに理解できる施設はないのだから、そこはさしずめ「地域」の広報の役割を果たす格好の窓口になるに違いない。そこに行けば自分が新しく生活する場所がどのようなものかを、端的に知ることが出来るからである。

博物館はどこも苦しい予算の中でがんばっている。豪壮な博物館を建設し、コンピュータを駆使するのも一つの未来であるが、しかし苦しい中で工夫をこらしていくのもわが附属博物館の将来だと思ふ。今後は展示に外国語の解説を混えることも必要であろうし、またより分かりやすい展示を心がけることも不可欠になろう。ただ分かりやすく説明することほど難しいことはない。講義前のノート作りと同じく、そのためには入念な準備を

必要とする。附属博物館では現在でも収蔵品の地道な整理作業が続けられているが、このような意味でも、今後はぜひ研究体制の充実を図っていただきたい。それこそが未来における博物館のための、当たり前だがしかし最も大切な作業だと思う。

(人文学部 助教授)
附属博物館運営委員

博物館実務実習の今後について

平成3年度の博物館実務実習は、最終の希望者が130人を超え、従来のように夏季休業中、前半・後半の2回に分けての実習だけでは困難となり、実習開始以来初めて、秋季休業中の実習も含め、3回の実施となった。

実施者の内訳は下表のとおりである。

		人文	理	教育	合	計
第1回 7/18~24	A	9	6	3	18	52
	B	19	1	14	34	
第2回 8/26~30	A	10	13	5	28	52
	B	17	6	1	24	
第3回10/1~7		10	10	5	25	
合計		65	36	28	129	

平成元年度76名、同2年度104名、そして今年度と、ここ数年の実習生は年を追うごとに増加しており、今後もその傾向は続くと思われる。今年度はやむをえず3回目の実習を設け、希望者に対応することにしたが、学生の実習可能な期間(集中講義や学部他の実習との重複)、博物館の従来業務(9・10月の公開講座開講や11月の特別展開催)を考え合わせると、3回目の実習時期についてはきわめて無理がある。

問題となるのは実習時期だけではない。今年度の第1・2回目の実習ではそれぞれ52人と、多人数での実習となり、「実務実習」という本来の姿からは少々逸脱していると言わざるをえない。少人数(2~3人)で、博物館日常業務に即した実

習を行うことが理想であることはむろんのことだが、現状でその理想に近づけることは、これまた不可能に近いものがある。仮に、100人の実習希望者に日常業務の中で5人ずつ5日間の実習を実施することになれば、なんと100日間という日数が必要となってしまふ。

このような問題点解決のため、本館での実習実施人数を制限するなどの具体的な対策が急がれる。

また、ここ2~3年、博物館学の講義は後期開講(年末年始にかけての集中講義)となっているため、2年次に受講していない3年生は、実習後に受講する形となり、実習実施の時点で博物館学の知識をほとんど持ち合わせていないことになってしまう。博物館学のみならず、実習実施時の3年次夏季休業の時点では、学芸員資格取得のため必要な単位の大部分が履習中、もしくは未受講ということになり、単位修得上のカリキュラムの問題もあげられる。

少くとも、博物館学は2年次において受講するよう学生に指導していくべきである。

以上のような問題点は、学生が実習最終日に提出する「実習を終えて」のレポート内容にも顕著に表われている。

「この実習が始まるまで、学芸員というものがどんな仕事をするのかさえ知らなかった」

「学芸員イコール机上の仕事というイメージが覆えされ、学芸員の仕事の多様さに驚かされた」

「学芸員を目指しているわけではなかったが、いろんな経験ができた実習は有意義だった」

などの記述が多く見受けられ、「学芸員は資料の研究をする」という部分的なイメージのとらえ方を脱しないままの実習参加、そして、最近の「資格」ブームに影響されているのか、就職事情によるものか、「とりあえず学芸員の資格でも……」という風潮が感じられる。

博物館や学芸員というものを数多くの人に理解し興味を持ってもらうことは、それはそれで重要なことと思われるが、実習希望者の年毎の増加は、本館の現体制では対処しきれるところまで近づいている。

博物館学が開講され、当館で実務実習を実施するようになり今年度で11年目となる。ここで、もう一度、実習の在り方、資格取得のための大要をあらためて見直し、今後の指針としていかなければならない時期にきているといえよう。

資料紹介

古銭コレクションの思想



古銭—西郷村川口出土

写真の古銭は上市市大字川口から出土したもので、唐代の開元通宝（初鑄621年）から明代の永楽通宝（1408年）まで唐銭1、北宋銭57、南宋銭2、明銭2、私鑄銭とみられる左下隅の著しく小型のもの1の計65枚である。中には加刀銭や偽銭といった一種の偽造銭も含まれており、渡来銭の流通もかなり普及した15世紀後半以降に蓄えられたものと推定される。中国からの渡来銭は平安末の日宋貿易以降、独自に貨幣鑄造を始める江戸初期まで日本国内で通貨として用いられた。上市市は板碑の多いことで知られており、中世には村山と置賜を結ぶ要所として経済的にも文化的にも発展していたことが想像される。この銭は川口の有力者の蓄財の一部ではないだろうか。

古銭の出土地や出土状況は歴史の一面を語るが古銭特有の性格が調査の障害となることがある。骨董的な価値をもつため調査する前に散逸する例が多いのである。古銭の蒐集は古くから行なわれ、足利義満や北方探検で著名な近藤重藏も蒐集家、研究者として知られているが、江戸時代一般庶民の間で古銭はどのように考えられていたか、それを知る資料として「再板 袖室古銭譜」（三浦文庫）がある。

縦30cm、横30.5cm程の紙の両面に計114種の古銭が木板刷されたもので、文化3年(1806)、江戸馬喰町の西村某の発行によるものである。序文に、近来古銭に関する書は多く出ているが、便利なのがないので童蒙（初学者）にも役だつようにという出版の意図が述べられている。枠の上中央に古銭の図、その右に名称、下にその銭のもたらす御利益、最後に鑄造した皇帝（天皇）と、発行年が何年前か、という構成になっている。

御利益とは、例えばと同開称の場合、「このぜにを持ば、ろく（禄）にあり付、のぞみかなうなり。ふうふの中むつまじ」といった具合で、家内安全、高亮繁盛、厄除け等現代に通じるものもあれば、「よきかたなをもつ也」（元祐通宝）、「ほうこうもちてよし」（軌道元宝）など江戸時代らしいものもある。「すべて下に大の字のあるものは鼻血をとめる」など目や鼻の病に関するものが多いのも面白い。また書体による区別もある。

収録されている古銭は、皇朝十二銭、中国・朝鮮のもの、絵銭に分類できる。絵銭とは大黒や夷などの図案や念仏、題目などを鑄込んだ銭貨の形をしたもので、厳密には貨幣ではないが当時の通貨の寛永通宝と同形のものも混入されて用いられることもあった。いずれにして江戸時代のもので当時にすれば古銭にはあたらないが民間で小規模に作られたため、稀少価値があったことと、図柄がめでたいものであることがあってコレクションの対象となったのであろう。

中国銭の中には国内通貨として流通する北宋銭以前のものも少なくない。弥生遺跡から出土例のある秦の始皇帝が紀元前175年に発行した「半両」をはじめ、前漢、魏、隋など日本では通貨としてより一種の宝飾品として扱われた古い時代のものが収録されている。

初心者向けというだけあって銭そのものの説明はごく簡単であるが、掲載されている銭貨の種類、書体によって区別している点を見るとかなりのレベルといえよう。しかもこれが再版である。あるものは骨董的な価値を求めて、あるものはお守り的な役割を求めて、古銭のコレクションは江戸庶民のひそやかな楽しみであったかもしれない。

当館では12件333枚の古銭（渡来銭）を所蔵しているが、標本作成が目的であつたらしく種類別に数枚抽出しているため51種ものサンプルがある。



「再板 袖室古銭譜」と同開称。半両の部分

平成3年度
公開講座・特別展を終えて

近年、私達を取りまく環境の変化は激しく、また生活への影響も大きい。「環境」という言葉がここ数年、マスコミや出版物でさかんに取り上げられ、環境問題への市民活動の盛り上がりがあるのはそれを示しているといえます。

「豊かな時代」といわれる今こそ、その「豊かさ」に惑わされることなく、私達は「環境」について考え直すべき時期にきているのではないでしょうか。平成3年度の公開講座は、「環境と生活—都市—」というテーマで、都市生活を中心に多方面から環境を考え、理解することを目的に開催されました。

講師及び講義科目

回 月 日	講義科目	時間	官職氏名
	開 講 式		
第 1 回 9月28日	古代都市の伝統	120分	人文学部教授 矢野 直
	都市空地とオープンスペース	〃	教育学部教授 中川 重
第 2 回 10月 5日	水の環境科学	〃	工学部教授 阿部 重喜
	野草が語る環境の変化	〃	教育学部教授 前田 保夫
第 3 回 10月12日	地球環境問題	〃	工学部助教授 高橋 幸司
	長寿と環境	〃	医学部教授 新井 宏朋
第 4 回 10月19日	日本古代の都市	90	教養部教授 仲野 浩
	〃	〃	〃
	終 了 式		

特別展「環境と生活—都市—」

公開講座「環境と生活—都市—」の延長として開催し、講座の内容を資料を用いて広く一般に紹介したものである。

1. 期間 平成3年11月5日(火)～15日(金)
2. 会場 附属図書館会議室(3F)
3. 主な展示資料

I. 都市の環境と空間

指導：教育学部 教授 中川 重
山形市街化区域における緑被分布密度図、山形市中心部における駐車場の分布図 ほか

II. 山形市街の変遷

最上家在城諸家中町割図ほか6点(県立図書館蔵)
山形県山形市街全図(M10年)、測量道具、山形県新築明細図、山形大火実況、火事装束 ほか

III. 開発と自然景観

指導：教育学部 教授 前田 保夫
山辺町における西洋タンポポと日本タンポポ分布図、知られざる琵琶沼、富栄義の象徴アオコ ほか

IV. 地球環境問題

指導：工学部 助教授 高橋 幸司ほか
地球環境問題への戦略、公開討論会主旨、地球環境問題の現状と研究会への取り組み(河川汚染問題、酸性雨問題、地下水汚染問題、森林破壊問題等)

平成2年度見学者総数

一 般 成 人	個 人	520 (人)
	団 体	29
大 学 生	個 人	369
	団 体	135
児 童 生 徒	個 人	13
	団 体	40
合 計	個 人	902
	団 体	204
	総 数	1,106

山形大学附属博物館蔵 AC18 1992. 3. 31発行
編集兼発行人 山形大学附属博物館
(〒990) 山形市小島町1丁目4-12
☎0236-31-1421 (内) 2921